

3密の意義をみつめなおす “触” の大博覧会

国立民族学博物館 グローバル現象研究部 准教授

広瀬浩二郎

今年の年賀状に僕は「サーロインのように味わい深く、ヒレのようにヘルシーな1年を！」と書いた。今年は僕が国立民族学博物館に着任後、20年となる。9月～11月には、特別展「ユニバーサル・ミュージアムさわる!“触”の大博覧会」を担当する。本展は僕の20年間の研究を集大成する企画であり、多くの来場者にとって味わい深いものになることを願っている。

問題はヘルシーの方だろう。9月の特別展開幕までに、コロナ禍が終息し、来場者が安全に展示を楽しめる環境が整うことを切望する。もともと、本展は昨年秋に実施される予定だった。4月に緊急事態宣言が出て、特別展の延期が決定した。昨年は在宅勤務が増え、出張も制限された。研究活動では不自由を強いられたが、コロナ禍はマイナスばかりではなかったと考えている。

僕の2020年を象徴する言葉は「3密=3みつ」である。自宅や研究室など、密閉された空間で静かに過ごす。自分と、もっとも密接な関係にある「私」との対話を重ねる。多様な人が密集できる特別展のプランを練り上げる。濃密な3密体験を通じて、全盲の僕は自分、社会、自らの障害を「みつめなおす」ことができた。「3密=3みつ」の成果として、昨年10月に『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける!』を刊行した。この新著は、いわばコロナ禍の副産物である。



トーテムポールの触察
(国立民族学博物館にて)

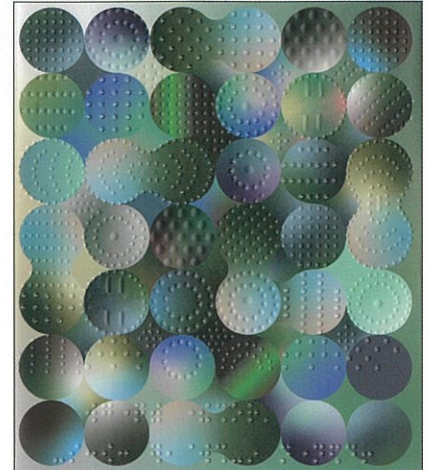
感染拡大予防のため、人・物との濃厚接触、3密を避けるのは大切だろう。しかし、「さわらない・さわれない・さわらせない」昨今の社会状況は、時に過敏・過剰なのではないかと感じる。本来、人間のコミュニケーションにとって3密は重要である。また、文化とは人間同士の触れ合いによって育まれるものともいえる。そんな“触”が全否定されることに、僕は違和感、危機感を抱いている。

拙著のタイトルは、あえて「僕」ではなく、「僕たち」とした。視覚障害者の日常生活は、濃厚接触の連続である。点字の読み書きなど、触覚情報は視覚障害者のQOL（生活の質）向上には欠かせない。全盲者が外出すれば、周囲の人の支援（手助けと手伝い）が必要となる。「コロナ禍で視覚障害者は困っている」「さわらなければ生きていけない人がいることを思い出してほしい」。

これらは事実だが、単に弱者からのメッセージを発信するのが拙著の目的ではない。「非接触社会から触発は生まれない」。こんな僕の信念を健常者、視覚に依拠して暮らす人々に届けたい。“触”の普遍的（ユニバーサル）な意義を認め、「僕たち」の仲間に加わってくれる人をどこまで増やすことができるのか。特別展がステーキハウスだとすれば、拙著が肉のおいしさを引きだすスパイスになれば嬉しい。

特別展では、さわることを前提に制作された多彩なアート作品を紹介する。さらに、「音にさわる」「風景にさわる」「歴史にさわる」など、ユニークなセクショ

ンを設け、全身の感覚を刺激する仕掛けも準備している。もちろん、視覚障害の有無に関係なく、すべての展示物を自由に触れて鑑賞できる。拙著を片手に、たくさんの方々が“触”の豊かさを体感する。接触と触発の連鎖が、特別展から世界へ広がることを期待している。



それでも僕たちは
「濃厚接触」を続ける! 広瀬浩二郎
世界の感触を取り戻すために

きつと“触”の大博覧会は、3密、濃厚接触の本義を僕たちが再確認する場になるだろう。「やはり、さわらって楽しいなあ」「リモートもいいけど、視覚だけでは伝わらないことがあるね」。そんな感想を来場者とともに語り合いたい。さあ、サーロインのように味わい深く、ヒレのようにヘルシーな展覧会へ!

きつと“触”の大博覧会は、3密、濃厚接触の本義を僕たちが再確認する場になるだろう。「やはり、さわらって楽しいなあ」「リモートもいいけど、視覚だけでは伝わらないことがあるね」。そんな感想を来場者ととともに語り合いたい。さあ、サーロインのように味わい深く、ヒレのようにヘルシーな展覧会へ!



国立民族学博物館「世界をさわる」コーナーにて

みなさん、賛助に御協力をお願いします (檸檬新報舎)

「触」の大博覧会は2021年9月2日(木)から11月30日(火)までみんぱくで開催。実行委員会は、①前庭に大きな石彫を複数設置し、子どもを含む大勢の人々に“触”の魅力を体験してもらう ②図録等に点字・触図を入れ、視覚障害者対応だけでなく「さわるメディア」の可能性を提示する、との新たな目的実現のため寄付金を募っています。 問い合わせは 国立民族学博物館・広瀬浩二郎さん

メール: hirose@minpaku.ac.jp / 電話: 090-2454-3306